

継承日本語話者である大学生の読解プロセスに関するケーススタディ  
 A Case Study on the Reading Process of a Heritage Speaker of Japanese  
 at University Level

金山泰子・藤本恭子, 国際基督教大学  
 Yasuko Kanayama・Kyoko Fujimoto, International Christian University

## 1. はじめに

近年の国際化傾向に伴い、個々の言語使用状況は多様化しつつある。国際結婚の増加、保護者の仕事の関係により海外で教育を受ける子女の増加、日本や海外のインターナショナルスクール進学者の増加などを背景に、継承日本語話者も増加し多様化する傾向にある。継承日本語教育の調査・研究については、初中等教育における児童・生徒の学習を対象としたものは多いが、大学生の継承日本語教育を対象としたものは少ない。筆者らは大学の継承日本語教育に携わる中で、継承日本語話者である大学生の読みの特徴として「正確に理解できていなくても、一つの点に注目して想像力を働かせたり、意見を述べたり、批判したり、議論したりすることは得意」(p.51)である一方、精読には意欲的でなく、指示語や語彙についての質問に曖昧にしか答えられないという傾向があることに気がついた(金山・藤本 2017)。こうした現状にあって、明確に可視化しにくいこれらの学生達の読解プロセスを観察することが筆者らの課題であった。そこで、継承日本語話者である大学生の協力を得て、一部発話思考法を用いた読解プロセスに関する調査を実施した。

## 2. 調査の概要

本調査は、2018年10月から11月の間2回にわたり、1名の日本語母語話者と3名の継承日本語話者を対象に実施した。本稿では、その4名のうち1名の継承日本語話者に焦点を当てたケーススタディとして報告する。

### 2.1 調査対象

被験者は日本国内の大学に通う大学生 A である。A は筆者らが担当した継承日本語教育コースを履修していたが、調査時にはコースを修了してから2年以上が経過している。A の背景は以下の通りである。A は日本で生まれ、生後2ヶ月でハワイへ移住し、10歳までハワイ現地校で学んだ。その後小5で日本に戻り、小5から高3まで国内インターナショナルスクールに通い、日本の大学に進学した。大学初年時に筆者らが担当した継承日本語教育コースを1年履修した。言語環境は、母親は日本人、父親は日系アメリカ人で、家庭では母親とは日本語、父親とは英語で会話をしている。海外で日本語補習校には通っていない。

### 2.2 調査方法

本調査では、2回の調査を行った。1回目はテキストを読んで読解プロセスを観察する調査、2回目は1回目のフォローアップインタビューである。1回目の調査では、被験者に以下のことを行うように指示した。まず用意された読み物を

音読する。この際、読めない字があっても続けて読む。次に内容理解のために黙読する。次に内容を要約し、質問に答える。そして読み物の一部を音読し、考えたことを口頭で話す。この部分が発話思考法にあたる。最後にテキストのキーワードを挙げ、その理由を述べる。2 回目の調査では、1 回目の発話に関するフォローアップインタビューを行った。

今回の調査では精読のプロセスを観察するために黙読して理解するための時間をあらかじめ設けた上で、そのプロセスを可能なかぎり可視化するための方法として、一部発話思考法による調査を実施した。発話思考法とは「課題を達成する間に頭に浮かんだことを全て、声に出して語ること」である。館岡（2005）は読解研究に発話思考法を用いる利点として、「読解過程での問題点を明らかにすることができる」こと、「読み手の問題解決の方略を知ることができる」こと、「知識獲得の過程を観察することができる」ことの3点を挙げている。被験者に対しては、あらかじめ発話思考法のやり方について説明した上で、調査者が実際にやり方を見せ、さらにウォーミングアップとして練習を行ってから、実際の調査を開始した。

調査のためのテキストとしては、阿久悠による普段着のファミリー」というエッセイの一部を使用した（添付資料 1）。全体の文字数は 1377 字で、発話思考法に使用した部分は□で囲んだ 302 字である。時間の制約や、被験者への負担を考慮して、テキスト全体ではなく、一部について発話思考法を実施した。このテキストを選択するにあたっては、筆者らが担当した継承日本語教育コースの最終学期で読解教材として使用するテキストの内容やレベルと同程度のものとした。内容としては、戦後の高度経済成長期におけるマイカーの登場を契機に、内と外との区別が曖昧になり、個人、家族、社会の境界がなくなってしまったことを、普段着を例に挙げて批判的にとらえたものである。

### 3. 調査結果

#### 3.1 漢字語彙とテキストの理解度

A が音読時に読めなかった漢字・誤読した漢字語彙は 19 語、インタビュー時に自己申告した意味のわからなかった語彙は 7 語であった（表 1）。他の 3 名の被験者と比較すると、A は読めない漢字・意味のわからない語が最も多かった。

表 1 A の未知の漢字語彙

音読時に読めなかった又は誤読した漢字	素朴* 着衣 巖然 町内 他町村 尊重 毎に 放棄 門前 不作法 空恐ろしい 奪う* 実践 傍若無人 秩序 崩す 喝采を博す 国情* 打ち砕く
意味のわからなかった語彙（自己申告）	不作法 空恐ろしい 傍若無人 蹂躪 <sup>じゅうりん</sup> 秩序 喝采を博した 国情

表中\*を付したものは、最初の音読時には読めなかったが、その後のやりとりの中で読み方がわかったものである。また、表中の「蹂躪」は、本文中にもふりがなが付してある。表2は黙読後に、内容をまとめた発話である。

表2 Aの要約についての発話データ

普段着ファミリーについてで、なんか一般的には普段着ファミリーっていったら、その、たとえば素朴だったり、なんか無理をしてない感じ、が出てるイメージの家族だけど、最近では、その普段着のファミリーっていうその概念っていうアイディアが変わっている、で、それはたとえば、その、家にいる、家で着ている服のまま外に出たり、その、たとえば車を持つことによって、その社会と家っていうか、その、どこまでが自分のテリトリーでどこからが社会なのかっていう線が引きにくくなっているように私は感じ、これを読んで感じていて、で、だから、その、例えば日本のイメージとか自分の国のイメージを守るには、その、ちゃんとした意味で、その、自分が何着るかの自由っていうのを考えたり、ていかないといけない・・・ように取りました。

この要約から、全てを正確に理解しているかどうかを判断することはできないが、「最近では～アイディアが変わっている」という変化に言及し、また「どこまでが自分のテリトリーでどこからが社会なのかっていう線が引きにくくなっている」というように、普段着のまま外に出ることによって社会とプライベートの区別が曖昧になったことは説明できていた。このことから、未知あるいは誤読した語彙はあったが、大意はつかめていたと考えられる。

### 3.2 発話思考法データ

Aが発話思考法に要した時間は10分8秒で、被験者4名中最も長かった。発話思考法で得られた音声データから、Aの読みの特徴について分析していきたい。紙幅に限りがあるため、全てのデータではなく、被験者の特徴が出ていると思われる音声データを一部紹介する。表中では、被験者の特徴が出ていると思われる部分を太字にし、下線を施した。

以下は、文①「普段着の過信は、たぶんマイカーを持つようになってからのことだと思う。」についての発話データである。

表3 Aの発話思考法データ①

普段着を、世の中の人々が、こういうちょっと楽しめた普段の服をよく着るようになってい、だからほとんど、世の中の人(笑) 今普段着で歩き回っているようなイメージ (笑)。で、ま、みんな車を持っているので、車持っているほうが、なんかパジャマとか(笑)、ちょっとした、なんかジョガーとか？そのまま部屋着で出ている人のイメージは、あります。車を持てると。

この発話から見られる特徴は、普段着を「パジャマ」「ジョガー」など具体的な衣服に置き換えて理解しようとしている点、そして「イメージ」という言葉を2回使っていることである。しかしながら、「マイカーを持つようになってから」

という本文には、戦後の高度経済成長期による変化というニュアンスが含まれていると思われるが、Aはそこには着目せず、「今」「みんな車を持っている」と解釈して、時代背景まで読み取ろうとはしていないようである。

以下は文②「人々は普段着で移動するようになった。」についての発話データである。

表4 Aの発話思考データ②

普段着…普段着っていうことばで想像したのは、なんか、ほんとに、ジーンズ?と、なんか白Tシャツ一枚、みたいな、そんな想像が今一瞬わいたんですけど、でもなんだろう、最近だと、なんか、もう一回見直すと、今の時代ではなんか、あれ、なんていうの、ジョガーってなんていうんだろう、スエットのイメージのほうがわかる、スエットはいる人のほうがよく、なんか普段着っていうイメージが、今はします。

「普段着…普段着っていうことばで想像したのは」と言っているように、ここでもAはテキストから具体的なイメージを連想して理解しようとしている。文①よりさらに具体例が増えて、普段着をジーンズ、白Tシャツ、ジョガー、スエットなどに置き換えて解釈しようとしている。ここでも「イメージ」という語を2回使用しており、Aが自分なりに理解しやすいイメージを想像しながら読み進めていることがうかがえる。しかし、文①と同様、時代背景までは読み取っておらず、「今の時代」の話という発話が見られる。

以下は、後半部分の文⑦「ここでいう『自由』は、他人の自由を奪う自由という意味で、戦後日本人が実践した自由とはこれだけである。」についての発話データである。

表5 Aの発話思考データ③

他人の(?)…ここでいう自由とは…ここでいう自由…他人の自由を奪う自由…他人の自由を(笑)奪う自由、とは…あ、でも…自由…なんか、こういった、なんていうんですかね、なんか、イメージ的には、みんな自分の、ひとりひとは、みんな自分の、ある程度パーソナルスペースがあるっていうか、その、自分の、パーソナルスペースにある範囲、の中で行動をとっていると思うんですけど、そこまでを、invade?していくようなイメージ?…ってとっているんですけど…なんだろう…でも自由はみんなあるから、奪うことはできないっていうか…他人が気に食わないような行動をとることが、自由を奪うというのか…よく、わかんない、難しい。取り合えずなんか、人のスペースに、なんか、入る、イメージ

ここでAはまず「他人の?」と意味をはかりかねているような疑問調で話し始め、そのあと、「ここでいう自由とは…ここでいう自由…他人の自由を奪う自由…他人の自由を(笑)奪う自由、とは…」と、何度も同じ部分を繰り返し読んでいる。その後、「あ、でも…自由…なんか、こういった、なんていうんですかね、なんか、イメージ的には」と話し出し、「イメージ」することによって自分の言葉で置き換えて理解しようと試みている。「みんな自分の、ひとりひとは、みんな自分の、ある程度パーソナルスペースがあるっていうか、その、自分の、パーソナルスペースにある範囲、の中で、行動をとっていると思うんです

けど、そこまでを、invade?していくようなイメージ?」と話しており、部分的に英語を使いながらも、「他人の自由を奪う自由」という本文の意味を、自分なりに説明できている。最後に「よく、わかんない、難しい」と言っており、自信が無いようではあるが、概ね文の意味を理解しているようである。ただし、ここでも「戦後」という言葉には着目していない。

以下は最後の文⑧「他人の自由を奪う自由、これが普段着の精神性にとりついて、傍若無人の自由として蹂躪するのである。」という文に対する発話である。

表6 Aの発話思考データ④

まずこれ(傍若無人)が何かわからない。で、その、人のスペースに?入る?というそのたぶん気付いていないうちに自分が人の場、スペースを invade しているっていうか、自分の範囲がわかりきれてない、人が、多分他人の自由をうばったりしている、と思うので、その、その精神?自分がどこまで何をしたいのかっていうリミットがわからない、っていうその精神、が、最近の人?には多いのかなっていう、その、どこまでが合ってる、どこまでが正しくないのかっていう線引きが引けてない、人が今の時代は多いかな、とは思、んですけど、その「蹂躪」っていう漢字もわからない。でも「足」って入ってるから、イメージ的には「踏み入る」感じ。わかんないです。そんなイメージ。

ここでは、「傍若無人」の意味がわからないと言いながらも、「人のスペースに入る」「invadeする」「自分の範囲がわかりきれていない」「他人の自由をうばう」「リミットがわからない」、「線引きが引けていない」のように自分の言葉で言い換えることを繰り返しながら、少しずつ理解を深めようとしている。「蹂躪」という漢字も、わからないながら「足」という部首からイメージして読んでいる。また、ここでも「戦後」という文脈ではなく、「最近の人」「今の時代」という解釈で読んでいるようであった。

### 3.3 キーワード

Aに、テキストから三つのキーワードを抽出してもらい、その理由を述べてもらった。Aは、「自由」「社会」「個人」というキーワードを挙げた。三つのうち「自由」というキーワードを選んだ理由が、Aの読みの特徴を表していると思われる。以下は、Aが「自由」というキーワードを選んだ理由を述べた発話データである。

表7 Aのキーワードと理由についての発話データ⑤

<前略>たぶん海外の影響もあって、普段着が変わってきている理由もあると思うので、なんか、特に今の日本人は、アメリカのアーティストとか、アメリカの海外セレブとかの、その服装とかすごい取り入れているイメージが多いので、そういった外からの影響?を取り入れるのは、その、一人ひとりの自由、とは思うんですね。その、日本の中での感覚?日本人がよく着るような服だけではなく、外から持ってきた、こういうものを着たい、日本には売ってないけど自分で作ろうとしたりする、そのアイディアは、一人ひとりの自由だとは私思ったので、その日本、その最近の、ま、人が、そのメリハリをちゃんとつけられなくなってきたのは、ある意味みんなの自由っていうか勝手に(笑)行動とっていることからきているのかなあと思ったので「自由」を選びました。

「今の日本人は、アメリカのアーティストとか、アメリカの海外セレブとかの、その服装とかすごい取り入れている」「こういうものを着たい、日本には売ってないけど自分で作ろうとしたりする、そのアイディアは、一人ひとりの自由だ」と述べており、Aが、戦後という背景を読み取らず、現代の日本人の日常的な服装の問題として、この文章をとらえて、キーワードを選んだことがうかがえる。

### 3.4 フォローアップインタビュー

1回目の調査から、Aが現代の話としてこの文章を読んでいることがうかがえた。そこで、Aが「マイカー」「サンダル履き」など、固有名詞でありながら、戦後を表象する語のイメージをどう捉えているか、また戦後についてどのような知識やイメージを持っているかを確認するために、フォローアップインタビューを実施した。この読み物を理解する上で「戦後」が1つのキーワードであり、解釈のポイントになると考えたからである。Aの回答は「マイカー」については「愛車」や「自分の車」、「サンダル履き」は「草履」という答で、それ以上のイメージは出てこなかった。また戦後のイメージについても「何もかも崩れた町」「人口が減って生きるのが大変」「残されたものは生きるのに苦戦する」といった一般的なイメージや印象を表す答えは出てきたが、それだけに留まり、日本の戦前戦中戦後については特に背景知識やイメージを持っていないようであった。

## 4. 考察

### 4.1 Aの読みの特徴

発話思考法データを中心にAの読解プロセスを分析すると、以下のような特徴が見られた。第一に、テキストから連想した具体的なイメージを用いて文脈を理解しようとしていたことである。例えば、普段着を、スエット、ジーンズ、Tシャツなどの身近で具体的なものに置き換えて読んでいたのはその一例である。第二に、文を何度も繰り返し読んでいたことである。「読み直し」というストラテジーについて、Block (1986) は「読み直しは内容について考える時間の反映」(p.472) であると指摘しているが、Aも、繰り返し読むことによって理解に近づいている様子がうかがえた。第三に、文章に出てきたことばがわからなくても、他のことばに言い換えて読みながら理解につなげていく様子が見られた。Aは発話思考法における発話時間も10分8秒と長く、時間をかけて何度も言葉の言い換えを繰り返しながら理解しようとしているプロセスが見られた。第四に、わからない語彙を漢字の部首から類推して読んでいたことである。これらは理解のためのストラテジーとして有益であると言えよう。Aが未知の漢字語彙が多かったにもかかわらずテキスト全体の大意を理解していたのは、これらのストラテジーによっていたからではないかと思われる。

一方で、テキストを読んでイメージする内容が日常的な範囲に限定され、時代背景を読み取れていないことも浮かび上がってきた。例えば「マイカー」のように戦後の高度経済成長期を表象するような表現をその時代背景とは結び付けず、

「今」の身近なものとして解釈し、テキストを現代の日本人の日常的な服装の問題としてとらえていた。それは、発話思考法データからも、キーワードの抽出やフォローアップインタビューのデータからも明らかであった。Aは、「戦後」という時代背景を読み取れなかったことにより、文章の内容を現代の身近な問題としてとらえることに留まっていた。そのため、テキストを社会という大きな空間で捉えること、過去と現代との流れという長い時間の中で捉えることには至っておらず、抽象的なレベルの読みには繋がっていないということがうかがえた。

上に述べた A の読みの特徴は、筆者らがこれまで継承日本語話者の読解授業で気づいた学生の読みの傾向に通じるものがある。つまり、自分がわかることに注目して想像力を働かせながらテキストを理解することはできている一方で、語彙の表面的な理解に留まり、その言葉に含まれる背景や抽象概念までは読み取れていないということである。

#### 4.2 言語背景・教育歴との関連からの考察

A の言語背景、教育歴との関連から、今回の調査結果について考えてみたい。前述したように、A は日本で生まれ、生後 2 ヶ月でハワイへ移住し、10 歳までハワイ現地校で学んだ。その後小 5 で日本に戻り、小 5 から高 3 まで国内インターナショナルスクールに通い、日本の大学に進学した。ここで、A がハワイから日本に移住した「10 歳」という時期に着目してみたい。中島 (2010) によれば、9 歳から 10 歳の時期は、ちょうど言語形成期の前半から後半に移る時期であり、読み書きの基礎から読解力・作文力へと発展させる時期であると同時に、抽象概念・抽象語彙の習得へと移行する時期で、言語形成において非常に重要な時期である (p.23)。この言語形成期との関連から A のケースについて考えてみよう。A は 10 歳までハワイ現地校で学んでおり、補習校には通っていなかった。家庭では日本語を使っていたが、言語形成期前半における日本語の読み書きの基礎、そして読解力・作文力、抽象概念・抽象語彙を学び始める機会が限られたことが予想される。その後 10 歳で日本へ移住し、インターナショナルスクールに転入した。生活言語面では日本語のインプットは増えたと思われるが、学習言語や抽象概念・抽象語彙に触れたり、日本の社会情勢や歴史的背景について学ぶ機会は限られた可能性があるのではないかと思われる。

こうした背景が A の読みにどの程度影響しているかを測ることは難しいが、このような教育背景や移住時期にも注目し、それらが日本語継承語話者である学生の読解力・読解ストラテジーとどのように関わっているのかを観察することも今後の課題の一つであると思われる。

#### 5. 課題

最後に、今回の調査から見えてきたことや考察の結果から浮かび上がってきた課題を整理しておきたい。

調査研究課題としては、次の 2 点が挙げられる。まず、本調査で観察した被験者 A の読解プロセスは、筆者らが継承日本語話者の読解授業で気づいた学生の読みの傾向や課題と合致していたが、こうした傾向や課題が継承語話者に共通し

て見られるものなのか、データの数を増やして検証する必要がある。さらに、どのような教育歴、言語環境で過ごし、どの時期で移動して、言語・文化環境の変化があったか、それらの要素が学生の読解とどのように関わっているかを調査していきたい。

また授業実践における課題としては、次の2点が挙げられる。まず、学生達は読み物の時代背景・歴史文化的背景などを理解せずに読み進めている可能性があるため、これらの説明・指導を丁寧にする必要があるということである。また、読んだ内容について具体から抽象へと思考・表現を移行する手助けをする必要があるだろう。

今後さらに調査方法を見直し、データを増やして研究を進め、そこから得られた知見を授業実践に活かしていきたい。

### 参考文献

- 海保博之・原田悦子（1993）『プロトコル分析入門』新曜社
- 金山泰子・藤本恭子（2017）「第一言語／継承日本語話者である大学生のための日本語教育—2016-2017 特別日本語教育読解授業報告」『ICU 日本語教育研究』14, 45-53.
- 舘岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習—』東海大学出版
- 中島和子編著『マルチリンガル教育への招待 言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房
- Block, E. (1986). The Comprehension Strategies of Second Language Readers. *TESOL Quarterly*, 20, 463-494.



## 資料1 調査に使用したテキスト

## 「普段着のファミリー」

「普段着のファミリー」というと、素朴で正直で、飾りつけのない、好ましい家族のよう  
にうけとめられるかもしれないが、実は違う。僕がここで、表題にしてまで書こうとしてい  
る「普段着のファミリー」とは、社会に対しての適応性や、他人に対する最低限必要な緊張  
感や、時と場合を全く心得ない家族のことである。

もちろん、余所行きと普段着という区別での、着衣の普段着のことも含まれている。そも  
そもは、ある時ふと、伊豆から東京への移動の途中で見かける人々のことを、いつから日本  
人は普段着で旅行するようになったのだろうと、疑問に思ったことから発している。

思い出してみしてほしい。かつては、家と社会という意識が厳然としてあって、家から一歩  
出るとそこはもう社会であると思っていた。家の中では相当にダレた姿をしていますが、煙草  
を買いに出掛けるだけで社会用に、ジャケットの一枚も羽織ったものである。ぼくの父は必  
ず中折れ帽をかぶった。

家からほんの数メートル、同じ町内でもそうであったから、他町村へ出掛けたり、まし  
てや東京へ出るともなると晴れ着に近い物を選んで、最大の誠意を示し、同時に社会という  
他者の垣根の中で緊張を持って過ごせるように、覚悟を決めたものである。

それは実に面倒なことであったが、これがよかった。社会には自分で押し通せないことが  
いっぱいあり、時には他者に自分を合わせることも必要だと、教えられたからである。また、  
人間というのは個々大した存在ではないけれど、社会を尊重し、味方に引き入れることで、  
つまり着更える毎に大きく見せることが出来るのだともわかった。それを今、多くのファミ  
リィは得々として放棄しているのである。

普段着の過信は、たぶん、マイカーを持つようになってからのことだと思う。人々は  
普段着で移動するようになった。自分の家の門前から、サンダル履きのまま東京都心へ  
直入出来る。楽で、便利であろうが、不作法のまま家族が移動し、不作法のまま他  
人の社会を踏むかと思うと、実に空恐ろしい感じがするのである。ファミリーはしっか  
りと不作法の同志となり、自由を満喫する。満喫する方はいいだろうが、される方はた  
まったものではない。

ここでいう「自由」とは、他人の自由を奪う自由という意味で、戦後日本人が実践し  
た自由とはこれだけである。他人の自由を奪う自由、これが普段着の精神性にとりつい  
て、傍若無人の自由として蹂躪するのである。

たかが余所行きと普段着、着る物の選択で何ほどのことがあろうかと思われるかもしれな  
いが、メリハリのつかない生活感が、メリハリのつかない社会観や人生観に繋がるのである。  
「個人」と「家族」と「社会」というたった三つの顔が出来ない人たちに、秩序や節度を期  
待することは無理であろう。個の過信が社会を崩す。そのメリハリを、どこで失い、どこで  
放棄し、どこで平気になってしまったのであろうか。

ファッションや行動に自由が持ち込まれて喝采を博したのは、ついこの前のことである。  
ぼくもその時は、大いに手を打ち鳴らした。しかし、この自由を使いこなすには、相当に練  
り上げられた社会人としての教養、場を心得ることの出来る品性と、それぞれが内面に抱  
いたタブーが必要であった。それを考えないで使い放題の自由は、伝統も国情も個性もすべ  
て打ち砕き、何でもありの、何でもなしにしてしまったのである。

〔出典：阿久悠「普段着のファミリー」『文藝春秋』2003年12月臨時増刊号所収〕